

鎌倉文化を訪ねる

神奈川県立金沢文庫学芸課長 西岡芳文さんに聞く

「鎌倉文化の精華を伝える金沢文庫」

鎌倉の世界遺産候補地のひとつに、横浜市金沢区の称名寺があります。それに隣接する金沢文庫は、北条実時によって建立された称名寺の一角に設置され、歴代の金沢北条氏が拡充していった武家文庫として広く知られています。

この金沢文庫は消滅しましたが、中世の貴重な文化財は称名寺などに伝えられ、現在の神奈川県立金沢文庫に遺されています。その遺された経緯や文化財について、県立金沢文庫の西岡芳文さんに伺いました。

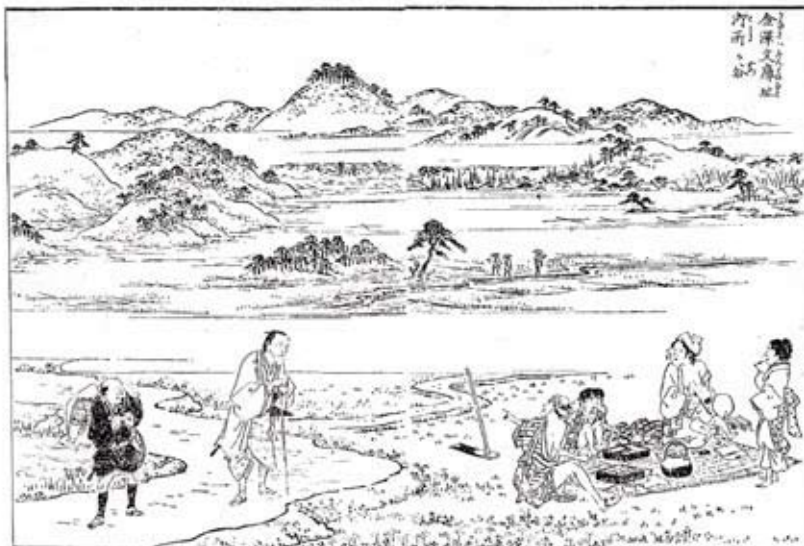
「武家の古都・鎌倉」の世界遺産のエリアの中に、鎌倉からとび離れた称名寺が加えられているのを不思議に思われる方も多いかと思います。金沢は横浜市の南端で、古くは武蔵国に属する六浦庄という荘園でしたから、行政区分の上でも相模国に属する鎌倉とは別の領域であったのです。しかし『吾妻鏡』には、鎌倉の四隅を守るための陰陽道の儀式「四角四境祭」の式場の一角に「六浦」が挙げられていますから、ここが鎌倉時代から鎌倉の一部と見られていたことが分かります。鎌倉に通じる港湾として栄えた六浦津に連なる金沢の地には、北条義時の孫にあたる北条実時が本拠を置き、別邸とともに金沢文庫と称名寺を造営しました。

金沢文庫は北条氏の滅亡とともに主を失いましたが、称名寺は極楽寺と並ぶ関東の律院の中核として存続し、中世の貴重な文化財を守り伝えてきました。しかし明治維新によって寺領を失った称名寺は存続の危機に直面したのです。そこで寺宝の散逸を懸念した有識者の支援を受け、昭和5年(1930)に神奈川県が金沢文庫を再興することになりました。でも当初は名義だけの復興で、「昭和塾」という研修施設の付属図書館というような扱いだったようです。称名寺の池畔に建設された昭和の金沢文庫は、瓦屋根をのせた鉄筋コンクリート造りの頑丈な建築でしたが、文化財を安全に保管・公開するような設備は備えていませんでした。世界的に有名な「金沢文庫本」は江戸時代までにあらかた外部へ流出し、称名寺にはわずかな什宝以外には何も残っていないと考えられていたからです。

県立金沢文庫が発足して間もなく、称名寺の須弥壇の中に秘蔵されていたいくつかの大きな長持が金沢文庫に搬入されました。その中には、虫やネズミに食い散らされてバラバラになった膨大な古書の残骸が収められていました。初代文庫長となった関靖らが整理を進めたところ、中世の仏典の裏側に多量の手紙が残っていることが発見されました。鎌倉時代末期に執権をつとめた金沢貞顕の書状をはじめ、幕府中枢にいた人物たちの生々しい息吹が浮かびあがってきたのです。

鎌倉幕府の通史である『吾妻鏡』が、蒙古襲来の前(文永3年・1266)で中断しているので、鎌倉時代後半の歴史を伝える資料はさきめて少なかったのですが、新たに出現した「金沢文庫文書」は、その欠を補う貴重な資料として歴史学界に大きな波紋を広げました。同時に発見された「称名寺聖教」には、学僧たちが京都・奈良、さらに中国の新しい学問を鎌倉に導入しようとしていた様子や、鎌倉で芽ばえた念仏や禅・法華などの新しい仏教の胎動を示す資料が含まれていました。北条実時が中国から取り寄せた「宋版一切経」とともに、鎌倉時代の文化を知るためには不可欠の文化財となっています。

鎌倉文化の象徴とも言える金沢文庫は、平成になって収蔵・展示設備をそなえた新館に移りました。称名寺に伝わった2万点におよぶ国宝・重要文化財を保管・公開する博物館として、世界遺産の史跡として整備されたお隣の称名寺庭園とともに、鎌倉文化の精華を今日に伝えています。



江戸時代の金沢文庫跡(出典:『江戸名所図会』)